

嘉瀬はモツケで

ジョツパリでミンパハリ



山中正津

津軽一帯に言えることかも知れないが、人の不幸は、我が幸せと
いう。根性はさもしい限りだが、生活が貧しければ心までいやしくなる
のかも知れない。

嘉瀬にも、多分はその傾向があったのではないだろうか。こんな話も
伝え残されている。昔、ある老婆の古希(注II「人生七十古来稀なり」
から)のお祝いに、「婆さま、婆さま、お前七十まで長生きしたハンデ、
その間におもしろいことだの、悲しいことだのいっばいあったべ、その
うちで何一番おもしろくてあったば」と、聞いたら、その老婆は、

「ああ、隣りの家でカマドケシたの一番おもしろくてあったじや」
何も隣りの不幸を喜んでいてのではない。自分は不仕合せな人生を過
ごしてきたと思っていたが、それでもどうにか家、屋敷を売ることもな
く、夜逃げするほどの事もなく暮してきた。それにくらべ、隣家ではカ
マドケシて(倒産して)しまったのだから、その不幸を思えばわれはま
だ幸せだ。という意味だろう。

嘉瀬は八百年以上前から邑(むら)がつくられていると思われるのに(注II
嘉瀬八幡宮伝承、元亀二年(一五七一)嘉瀬八幡宮再建、創建年代不明
とあるが)記録に現われたのは正保二年(一六四五)津軽知行之帳(田
舎郡の新田「嘉瀬村」高五五石八斗)である。四〇〇年か四六〇年ぐら
いの間は全くかくされて(またはかくれて)いたのは何かがあるのでは
ないだろうか。

いる。

宵越しの金は持たない、というのは江戸っ子の弁だが、カセの人も明
日に食う米がなくても人とのつきあい(交際)は欠かさない。強欲な人
も居ない関係か、大金持(又は大地主)も少ない。

嘉瀬から芸能人が他町村にくらべ多く出ているのもそのような一面が
あるのではないだろうか。

モツケもミンパハリの一種、特に自分の得にもならないのに他人のた
めに一所懸命になる気質、これがカセ人なのだ。

カセは平家の落人の隠れ里として数百年間他の集落との交流がなかつ
たので、必然的に近親婚姻となり、だんだんと優秀な人種と劣等な人種
が出るようになっただろうし、癩病(レブラ)患者も集ってきたのは人
種差別をしない邑(むら)だったからであろう。

そして抵抗むなく天正一五年(一五八七)大浦為信に滅された「嘉清」
は、慶長年間には日本海回りで他国からの入植者が入り込んできたが、
調べてみれば源氏の系統よりも藤原氏、平氏の流れが多く、今では開村
当時の血統を探すことは難しい。

嘉瀬の貌は、そこに住む人の貌であり、冒頭の他人の不幸があつて、
それよりは自分の方が仕合わせだと考える程貧しかったが、それもモツ
ケ気質や見栄っぱりで強情な性格が富から遠ざかり、外目からは平凡な
村が嘉瀬である。

少し蛇足を加えて三十三年前の嘉瀬の姿を記してみる。

町村合併(昭和三十年三月一日金木町、嘉瀬村、喜良市村の一町二村)
前の嘉瀬は、人口五二三四人、戸数九九八戸で、集落は嘉瀬、中柏木、
長富、毘沙門の四つに分れているが、そのうち本村の嘉瀬の戸数は六一

ないだろうか。

それではその何かがとは何か、推測してみると、嘉瀬に住みついた村
人は、平氏滅亡後(一一八五安德天皇入水、平氏滅ぶ)の平家の落武者
が安東氏(藤崎安東)を頼ってのがれてくるが、未開の郷(さと)を探し求めて落
着いたのが、既にアイヌが開拓していた「カセ」であつた。

しかし、彼らはアイヌを征服したのではなく共存共栄し、更に混血し
て「カセ人種」をつくりあげた。

その証拠には言葉がある。津軽弁の中でもないような独得のカセ言葉
がある。それも京言葉にも近く、アイヌ語からのナマリみたいなのがあ
る。それが平氏の落人と土着のアイヌとの双方の言葉がミックスされて
きたのではないだろうか。

嘉瀬は美人が多い。次に隠れた文人が多い。また豪傑も多い。それぞ
れ多いがあまり表面に出たがらない。自己顕示欲が無い。

大岡裁きに三方壱両損というのがある。金を落した人、拾った人、二
人とも江戸っ子だというので、落した人は、一度自分の懐(ふところ)から出た金は
俺のものじゃないから、拾った人にサッサと持って帰れ、という。拾っ
た人は折角参両という大金を届けに来たのだからその金を貰って帰っ
ちや江戸っ子の名折れだからどうしても落し主に受取れと云う。

「受け取れ」 「受け取れねい」で埒(らち)があかず、とうとう奉行所へ一
件が持ち出され、大岡越前守が壱両を出し拾得金の参両と合せて四両と
し、双方にそれを二分し式両づつ分け与えて解決したというのが、奉行
と落し主、拾得者の三人が各壱両を損したという咄(はなし)であるが、江戸っ子
もジョツパリであり見栄っぱり張りである。

カセ人もミンパハリ(見栄っぱり)でジョツパリ(強情)は群を抜いて

五戸と全体の八六%も示めていた。

近年農村の姿を逆説的に歌ってスターブームに乗った嘉瀬出身の歌手
もあるが、「オラア、こんな村イヤダ」というのは、ホントに村を愛し、
村の発展を願っている言葉だと私は思っている。嘉瀬には、駅もあるし
郵便局もある。学校は中学校一、小学校二があつた。公民館、劇場、リ
ング検査所及び食糧事務所の出張所もあつたし、医院もあるし製材所、
精米所。農機具修理工場から旅館、料理屋、質やまであつた。神社七、
お寺二と部落を構成する機能は殆んど備わっていた。ただ、上級学校へ
の進学率は非常に低く、富の分配にめぐまれてない一端をのぞかせてい
る。昭和三十年以前の電話加入数二二、自動車所有台数四と記録に残っ
ている。だが、郵便の一日当り発着信は、人口比率にすれば金木よりも
高い。

発信 金木五六〇 嘉瀬四一〇 喜良市二四五

着信 金木八四〇 嘉瀬五七〇 喜良市三五〇

金木は、一人当り年間二四・五通、嘉瀬は二八・五通、喜良市は二六
・三通の手紙を書いていることになる。嘉瀬の人は口下手だが文章を書
くのは好きな人が多いのだろう。

俳句、川柳、短歌、また民謡、歌謡でも記録に残したい人が多いし、
奇人、変人と云われる人物も嘉瀬には出ているのである。

スポーツにおいても、ボクシング、相撲、スキー、駅伝競争など、イ
デオロギー的には右翼で名を為した者もいれば左翼で活躍した人もあつ
た。村政でも内では役場派、非役場派(与党、野党)とあつても、外に
向えば一団となって結束する強い部落団結意識が強いのも嘉瀬である。

町村合併の際に、嘉瀬村の沿革には次のように書いてあつた。

『本村(嘉瀬・小栗崎)は寛文、長富、毘沙門、中柏木は享和、文政年間に開拓され、金木組に属していたが、明治二十二年町村制施行とともに、嘉瀬、長富、毘沙門、中柏木が金木村から分離して一村をなし現在に至った。』

寛文と言え一六六一年、享和は一八〇一年、文政が一八〇三年でいまから二〜三百年前のことだが、これは農業の開拓のことを指したもので記録に表われる前に培かれた土壌に育った者たちが現在の嘉瀬の姿を形づけてきたのであろう。

懐中は空でも、お天道様(太陽)は平等に照らす。
天を仰いで「あア、今日は空いなア」



嘉瀬の貌

木村治利

城のような住宅の前で、大人達は津軽弁で話しているのに、傍の幼児たちは標準語で話している。田圃では短靴を履いた若者が大型トラクタに乗って耕土している。それなのに何ら違和感がない。

都会の風が嘉瀬にも漂ってきているのかも知れない。秋仕舞が終わると大人達は、我れ先に、と老人や子どもを残し、渡り鳥のように都会に出稼ぎに発って行く。何年か続くと次第に都会の水になじんでくる。その反面取残された老人達は、隣近所の交際もなく、孫にも見捨てられ、孤独に耐えひっそりと息をついて生きている。

外観は都会風でも、中味は過疎化へ進行している感じ、これが嘉瀬の

られる。つまりひとつひとつの「点」は誇張できるがそれが「線」に繋ぎとめるとなると、至難の技と心得、認識しておりますが、嘉瀬の貌は良きにつけ、悪しきにつけ対象の村落があつて、始めて比較の点数がつけられ、優劣の度合が表面化されると考えられるが、嘉瀬に住居している人々は自らの姿を鏡に写すことは馴れていない。

「点」を拾い上げると、米あり、リンゴあり、山あり、親しみ易いスキー場あり、駅の近くに小、中学の学舎があり、わけても民謡の盛んな土壌に恵まれ、失なわれていく人情あり、一見平凡な昔ながらの佇いの観があるが、それはそれで人はそれぞれの雅趣に富んでいる。

近代産業の施設からは見離されて、苛酷な生存競争からは取残されたが、反面公害的要素の悪影響もなく、ポツンと小さく存在している。高邁な政治家もなかったし、後世に残る著名な文化人もない。雑魚は雑魚なりに逞しく生きて来たし、これからも生き続けるだろうが、ただ「ナ、なだば」の反骨精神は旺盛であるが、それとは別に足を引張る「ありやなだば」の侮蔑の思潮も多く残されているのも事実である。

嘉瀬は民謡の古里と云えば聞えはよいが、元をただせば貧乏神の象徴であつたし、ほめられた図でないが、今は芸術の域に昇華し苦しかった生活の匂いを消すことなく後世に残しておいていきたいものである。

嘉瀬は自然の条件を有利に活用して、情報化時代を整理しながら環境改善に努力を傾注すれば津軽でも香り高い有数な村落が出現することは間違いないだろう。

今ここに嘉瀬の貌を時代劇の脚本になぞらえて下手な芝居を演出してみたい。登場人物は嘉瀬の土百姓田吾作と、名主、代官(某県知事)である。

貌のような気がする。

「ジョッパー」精神は、大住宅の新築、機械化農業の進展と、目をみるものばかりだ。

しかし農家の現金収入は、農作業の共同化を破壊させ、お互いにライバル意識を助長させた。地球は自分のために回転しているような錯覚に落ち入り、「隣に蔵建つあ、腹が立つ」ような気持になり、他人の足を引っぱる人もある。

昔から「嘉瀬十年」とか「嘉瀬モッコ」など、嘉瀬の人々を揶揄する言葉がある。その底流には「ホンツケ」(おろかももの)「エフリコギ」(見栄っぱり)が含まれているような感じがする。

大抵の農家は、農外収入なくして生計が成立しない、と云う人が多い。三割減反、米価引下げ、農産物の自由化など、深刻な状況のなかにおかれている。「農村という言葉は、過去の遺物だ。出稼ぎの村だ」といわれぬためにも今こそ「ジョッパー」の精神を発揮し、たとえ「モツケ」と笑われようと、祖先伝来の地、この嘉瀬の貌を守りたいものである。

嘉瀬の貌とは

原田万治

嘉瀬に生まれ、嘉瀬に育ち、順調に経過を辿るなら嘉瀬の土に還らなければならぬ運命の位置におかれている私共が、今改めて嘉瀬の貌を素直に、これが嘉瀬だと表現することは容易なことではない。

「貌」はいつばいあるようで無い、また無いようで沢山あるように考え

代官 今日お前らを呼び出したのは嘉瀬の土百姓田吾作なるものが誇大妄想の病に取り付かれ、世人を惑わしたと調書がついているが、それに相違ないか。まずは名主から申してみよ。

名主 お代官様、恐れながら申しあげます。これなる田吾作なる人は只ひたすらに働くばかりの能なしで世上を惑わしたなどは何かの間違いではないでしょうか。

代官 名主よお前も嘘偽りを申すと重い罪に問われることは承知であらうな。

田吾作 サテ田吾作お前は嘉瀬は一番良い所などとぬかしておるが子の目から見ればとるにたらぬただの田舎村でないか。

田吾作 恐れながらお代官様に申し上げます。なるほど嘉瀬はこれといった特異なものは今何所もございません。昔の面影もほとんど失なっています。それでも暖かい人の心のふれあいが、都会と違ひまして今に温存されております。それに自然の立地に恵まれ、これから限りの発展の可能性を秘めているのが嘉瀬の姿なのだと思います。

代官 何をぬかす。田吾作、てめえの云っていることはただの部落根性というものだ。子が治めている県内をみても嘉瀬ごときはゴマンとある。それがどうして嘉瀬は良い所などと云いふらすのだ。良いところがあれば具体的にチャンと申しのべてみる。県民所得からいってもビリから数えた方が早くせに、サ、どこが良いか云ってみろ。

田吾作 お代官様は人として智的なお方とお聞き申しておりましたが、

ただ今のお言葉を聞いてガツカリしました。

人は生きる為に、衣、食、住、娯楽、それにプラス・アルファがなければ生きる価値にあたいしないとわしらボンクラでも理解しておりますが、ただ経済指数がどうだとか、二次、三次産業が皆無に近いから、それだけでゴミ屑みたいに評価しているのであれば真に心外であります。

人はそれぞれに社会の中に於て持分があると思います。ひとつの持分を卒業したら、次の段階の持分と飛躍することは、農、工、商、役人であれかぎりなく広がって行くであろうが、ここで一つお代官様、人の心の古郷は近代工場の中だろうか、あり余るほど商品のある商店のなかだろうか、それともしかめ面の多い役所のなかだろうか。わっしらに云わせてもらえば、価値観の相違もあらうがそれはほかならぬ母なる大地の芽生えと信じています。

嘉瀬は昔から貧乏でした。今も貧乏です。貧乏の共有は誰も望みをかけたくありません。好きこのんで貧しさに耐えているわけではありませんが、今はかすかながら灯りの炎が大きくなっているのです。

村の西方には碁盤の目のような田圃が続ぎ、南には農用溜池があつて初歩の釣りには適して、北には小石が流れて、木の葉コ沈むの川で有名な奴節の小田川があり、東には立山と称しての観音様の杜がある。観音様の杜には西北きつてのゲレンデがあつて青少年の体育の向上に貢献しているのです。ことに観音様の杜の高台から北方を眺める時、下前の権現崎

が遠くに岩肌が見えるように眺められ、出穂も終り黄金色に輝やく稲穂が秋風に波打ち風情は、それこそ値千金で詩情豊かな風景は、わっしらだけで占有するのはもったいない気がするのです。

お代官様も暇ができたならば是非一度お出下さいますして頭を冷やして下さい。

代官 だまれ田吾作、予に向つて頭を冷やせとは聞き捨てならぬ言葉、早速入牢申しつける所存なれどそれほどまでに郷土愛に徹しているとは予も感服つかまつた。きつく叱りおくことにするがまだ云うことがあるか。

田吾作 恐れながら申し上げたき儀はこれからわが嘉瀬は精神的な安定剤として古郷の土の匂いを、みんなに無償で分かち合いたいと考へておりますがお代官の口からもよろしくお伝え願えれば幸いと存じております。

代官 ところでう田吾作、予も今は代官の職にあるが、代官職も選挙に勝ち抜かなければならないので名主、ともどもその節はよろしく。

田吾作 わっしはいやなことは右の耳から入つても、すぐ左の耳から飛びだす性分なので今の話は何も聞えませんでした。



嘉瀬八幡境内に鎮座奉仕せる人丸神石碑に寄せて

柿本人麻呂の伝記(下編)つづき

外崎 三千男

作歌解義 (三)

万葉集 卷第二(承前)



柿本朝臣人麿が、妻の死後、ひどく悲しんで作った長歌二首(一首目は「かたりべ第六集に所載」、本号(第七集目)には長歌の第二首目から所載となる。

二二〇 うつせみと思ひし時に一に云ふ、うつせみと思ひし たづさへて 吾が二人見しはしりでの堤に立てる つぎの木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど たのめりし 子らにはあれど 世の中を そむきし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野にしろたへの 天ひれがくり 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なすかくりにしかば 吾妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひなく毎に 取与ふ 物し無ければ をとこじもの わきばさみ持ち 吾

妹子と 二人吾がねし 枕づく つま屋の内に 昼はも うらさび暮し 夜はも 息つき明し 嘆けども せむすべ知らに 恋ふれども あふよしを無み 大鳥の 羽易の山に 吾が恋ふる 妹はいますと 人の言へば いは根さくみて なづみ来し 吉けもぞなきうつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 思えぬ思へば

大意

うつせみの世であると思つたときに、手を取り合つて、私と妹と二人で見た、家の近くの堤に立っているケヤキの木の、春の若葉のように、しげく思つた妹ではあるけれども、頼みに思つた子ではあるけれども、世の中の道理にそむくことは出来ないから、亡くなって、かげろうの立っている荒野に、白い布のひれに隠されて、鳥のように朝立つて行って、この世から入日が沈むように隠れてしまったから、我妹子が形見として残して置いたみどり子の、物を求めて泣いたびに、取り与える物もないので、男ながらみどりを抱き、嘗て我妹子と二人寝た妻屋の内に、昼は心淋しく暮らし、夜は嘆息して明かし、嘆くけれ

ども、どうするという手だてもなく、妹を恋しく思うけれども会う手だてもなく、羽易の山に行けば、そこに恋しく思う妹がいると、人が言うから、岩を踏み苦しんで来たのに、よいこともない。この世に生きているかと思つた妹が、タマカギル ただのかすかにも見えないのを思えば。

短歌 三首

214 去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

大意 去年見た月は、今も照らしているけれども、その時見た妹は亡くなって、次第に月日が遠くなって行く。

215 ふすま路を引手の山に妹を置いて山地を行けば生けりともなし

大意 フスマジヲ(枕詞)引手の山に妹を葬って置いて、山地を行けば、自分が生きているとも感じられない。

216 家に来て我が屋を見れば玉床のほかに向きけり妹が木枕

大意 家に帰って来て家の様子を見ると、物さびしく、木枕も床のあらぬほうに向っている。

短歌 吉備の津の采女の死んだ時、柿本朝臣人麿が作った歌一首と

217 秋山の したぶる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに

思ひ居れか たくなはの 長き命を 露こそは 朝に置きて 夕べは 消ゆと言へ 霧こそは 夕べに立ちて 朝は 失すと云へ あづき弓 音聞く吾も ほの見てし こと悔しきを したたへの 手枕まきて 剣太刀 身にそへ寝けむ 若草の そのつまの子は さぶしみか 思ひて寝らむ 悔しみか 思恋ふらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと

大意

秋山の紅葉のように美しい妹、しなやかな竹のようにたわたわとしたおとめは、どのように思っていることであろうか。タクナハノ長いはずの人の命であるものを。露は朝に置いて夕べには消えるものであり、霞は夕べに立って朝には失せるものというけれども、はかなくも死に去ったことである。アツサ弓その話を聞く私も、ほんのちよつと相見たことが思ひだされて、采女の死を悔しく思うのに、カクサノ夫たるものは、悲しく思つて一人寝ることであろう。残念に思い恋しがことであろう。定命ならずして死に去った采女は、朝露のごとく、又夕霧のごとくであろう。

短歌 二首

218 ささなみの滋賀津の子らが(或は滋賀の津の子が)まかりちの川瀬の道を見ればさぶしも

大意

サザナミの滋賀津の采女が死んで行った道、即ちこの川瀬の道を見れば、さぶしいことである。

219 天數ふ大津の子が会ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき

大意 大津の采女が私と会つた日に、ただほのかに見ただけであるので、今となって見れば、それが残念に思われる。

220 玉もよし 讃岐の国は 国柄か 見れど 飽かぬ 神柄が ここ

だ貴き 天地 日月と共に 足り行かむ 神のみ面と つぎ来たる 中の港ゆ 船浮けて 我がこぎ来れば、時つ風 雲居に吹くに 沖見れば しき波立ち 辺見れば 白波騒ぐ いさな捕り 海をかしこみ 行く船の がち引き折りて をちこちの 島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯もに 庵して見れば、波の音に しげき浜辺を しきたへて 枕にせして 荒床に こい伏す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉ほこの 道だに知らず おぼしくも 待ちか恋ふらむ はしき妻らは

大意

讃岐の国は、国の成り立ちのためか、見ても見ても面白い。神の成り立ちのためか、甚だ貴い。天地と共に、日月と共に、永遠に、満ち足りて行くであろう神のみ面として、つづいて来た所の、中の港から船を浮かべて、私達がこいで来れば、時つ風が雲の居る空に吹くのに、沖を見ればしき波が立ち、岸を見れば白波がさわいでいる。海が恐ろしいので、進む船の梶を引きしおるまで、漕いで行く遠く近くに、島は多くあ

るけれど、名の良い狭岑の島の、荒い石浜の上に、庵を作つてきてあたりを見れば、波の音のしきりにしている浜べを枕にして、荒い石の床に伏している人がある。その君の家が分るなら、家に行つて事の由を告げをしよう。妻がこの事を知るならば、来て尋ねもしよものを、その尋ねもしよものを、その尋ね来るべきタマボコの道も分らず、おぼつかなく待ち恋しがることであろうか。君が最愛の妻たちは。

反歌 二首

221 妻もあらば摘みてたげまし作美の山野のへのはぎ過ぎにけらす

大意

妻も一緒に居るならば、摘み取つて食うであろう。見れば野辺嫁菜も時過ぎて居るではないか。(異郷に屍となり、独り横たわっているあたりに、既に「嫁菜」も過ぎてしまつて居るといふ事で、作者の同情心の現れているわけである。)

222 沖つ波来寄る荒磯をしきたへの枕とまきてなせる君かも

大意

沖の波の寄せ来る、荒い磯を枕として頭をつけて、ここに寝ている君であるわい。

223 鴨山の岩根しまける吾れをかも知らにと妹が待ちつつあら

大意

鴨山の岩を枕として居る吾を知らずに妹が待ちに待っていることであろう。

柿本朝臣人麿が死んだ時、妻の依羅娘子が作った歌二首

224 今日今日と我が待つ君は石川の峽に（或は、谷に）交りてありと言はずやも

大意

今日帰られるか、今日帰られるかと、私が待つ君は、石川の谷間にはいつているというではありませんんか。

225 ただの会は会ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつしぬばむ

大意

直接には会い難いであろう。石川に雲よ立ち渡れよ。その雲を見て石川の谷深く、鴨山に居るといふ君をばしのぼう。

丹比真人が柿本人麿の心になって答えた歌一首

226 荒波に寄りくる玉を枕に置き吾こなりと誰か告げなむ

大意

荒波に打ち寄せられて来る玉を枕べに置いて、私はここに死骸となって横たわっていると、誰が我が妻に知らせて呉れることであろうか。誰もないことでしょう。誠に悲惨なことであるわい。

ある本の歌

227

大意

天ざるひなの荒野に君を置いて思ひつつあれば生けりともなし、都を離れて遠く淋しい曠野に君を置き捨てにし、君のことを思い続けて居ると、生きているとも思われない。

右の一首は作者が分らないが、古い本にこの歌をこの順序に載せている。

万葉集 第三

雑歌



天皇が雷丘にお出でになった時に、柿本朝臣人麿が作った歌一首。

235 大君は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも

大意

天皇は神にましますから、天雲の懸かる雷丘の上に、行宮をしておられることである。

「柿本人麿歌集」の一首

244 み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに

大意

吉野にある三船の山に立つ雲のように、変ることなく生きて居ようとは私は思わない。

柿本朝臣人麿の旅の歌八首

249 三津の崎波をかしこみ隠江の舟なる君は

大意

三津の崎は波が恐ろしいので、入江の港の舟に居る人があるが、その人は野島に行こうとして居るのであるうか。

250 玉藻刈る敏馬を過ぎて野島が崎に船近づきぬ（ある本には、「処女を過ぎて夏草の野島が崎に庵す我は」とある。）

大意

玉藻刈る（枕詞）敏馬を通り過ぎて、野島の崎に舟が近づいた。

251 淡路の野島の崎の浜風に妹が結びしひも吹き返す

大意

淡路島の野島の崎の浜風に、妹の結んだ着物のひもが吹き返される。

252 あらたへの藤江の浦にすすき釣る海人とか見らむ旅行く我を

253

大意

或本には「白たへの藤江の浦にいざりする」とある。藤江の浦に鱸を釣る漁夫であろうと私を見間違えて、見るであろうか、旅して行く私であるのを。

右の一首は作者が分らないが、古い本にこの歌をこの順序に載せている。

万葉集 第三

雑歌



天皇が雷丘にお出でになった時に、柿本朝臣人麿が作った歌一首。

235 大君は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも

大意

天皇は神にましますから、天雲の懸かる雷丘の上に、行宮をしておられることである。

「柿本人麿歌集」の一首

244 み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに

大意

吉野にある三船の山に立つ雲のように、変ることなく生きて居ようとは私は思わない。

「柿本人麿歌集」の一首

253 稲日野も行き過ぎてに思へれば心恋しき加古の島見ゆ

大意

稲日野も通り切れず、ものを思っていると、心引かれて恋しい加古の島が見える。

254 ともし火の明石大門に入らむ日やこぎ別れなむ家のあたり見す

大意

明石の大きな海峡に入ろうとする夕日に、故郷のほうも見ずに、漕ぎ別れて行くことであろう。

255 天ざる夷の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

大意

遠い地方の遠い道を通って恋しいたつて来れば、明石の海峡から大和の島が見える。

256 飼飯の海の庭よくあらし刈りごもの乱れ出づ見ゆ海の釣舟

大意

飼飯の海の海面がよく凪いでいるらしく、海人の釣舟の乱れ出ているのが見える。

261 柿本朝臣人麿が新田部皇子に献上した歌一首と短歌
 やすみしし 我が大君 高照らす 日のみ子 茂ります 大殿の上
 に 久方の 天伝ひ来る 雪じもの 行き通ひつつ いや常世ま
 で

大意

吾が大君、日のみ子の立派にして居られる大御殿のあたりに、天から降り来る雪のように行き通ってこの世の永遠の後までも仕えましよう。

反歌一首

262 矢釣山木立も見えず降り乱る雪に馬並む朝樂しも

大意

矢釣山の木立の有様も見えないまでに降り乱れている雪に、馬を並べて君に従う朝は楽しい。

柿本朝臣人麿が近江の国から都に上って来た時、宇治川のほとりで作った歌一首

264 もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行く方知らずも

大意

宇治川の網代木のあたりに、流れようとして流れ切れずにいる波は、流れ行くべきかたもなく、たええられている。

柿本朝臣人麿の歌一首

266 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬに古へ思ほゆ

大意

出雲の娘子は霧でもあろうか、吉野の山の峯にたなびくよ。

430 八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ

大意

出雲の娘子の黒髪は、吉野の川の川中に流れかねている。

柿本朝臣人麿の歌四首

496 み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直にあはぬかも

大意

紀州熊野地方の海岸近くに生えている浜木綿の百重であるように心だけはあれこれと熱烈に思うけれども、実際には中々会わないことである。

497 古へにありけむ人も我が如か妹に恋ひつつ寝ねがてにせむ

大意

古い時代に生きた人も、私のように妹に恋い恋いして夜も寝られなかったことだろうか。

498 今のみのわざにはあらず古への人ぞまさりてねにさへ泣きし

大意

恋に苦しむのは、今だけのことではない。昔の人のほうが一層泣きに泣いた。

大意

近江の海の夕波の千鳥よ、お前が鳴けば心もしおれていにしえのことが思われるよ。

303 柿本朝臣人麿が、筑紫の国に下った時、海路で作った歌二首。
 名くはしき印南の海の沖つ浪千重に隠りぬ大和島根は
 名のよい印南の海の沖波で、大和は幾重にもかく
 れてしまった。

大意

304 大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

大意

天皇の遠く朝廷たる大宰府に、人々が常にかよう島の海峡を見れば、神代のことと思われる。

柿本朝臣人麿が、香具山で死人を見て、悲しんで作った歌一首。
 草枕旅の宿りに誰が夫か国忘れたる家待たまくに

大意

旅の宿りに誰の夫が国を忘れて死んでいるのだろうか。家ではみんなが待っておるうに。

429 溺死した出雲の娘子を吉野で火葬した時、柿本朝臣人麿が作った歌二首
 山のまゆ出雲の子らは霧なれや古野の山の峯にたなびく

499 百重にも来しけかもと思へかもと思へども君が使の見れど飽かさ
 らむ
 何度でも来て呉ればよいと思うからであろうか、君からの使は、見ても見ても見飽かないのだろう。

大意

柿本朝臣人麿の妻の歌一首
 君が家に我住坂の家路をも我は忘れし命死なずば
 住坂にある夫の家へ赴く道も、私は忘れまい。命の死なぬ限りは。

大意

(終り)

